

『田舎者』の自己樹立(二)

— 大分県における近代化と文学の問題を考える —

古 庄 ゆ き 子

(一)
一九〇〇年代初頭、つまり明治三十年代半ばに、先駆的活動のはじまった大分県下における新しい文学活動は、実学主義の批判とともに、旧派文学の根強い抵抗を受けねばならなかった。

本誌前号所収拙稿で述べたように、一九〇〇年代から二〇年代初にかけて大分師範学校長としてこの地にあり、同時に県下俳句界のリーダーでもあった峯青嵐は、県下の俳句を、「風呂屋文学」「床屋文学」と批難し、「陋習を打破して、大分県下の文芸上に於て一新生面を開きたい」とのべ、また、鹿島青波、のちの葉山耕三郎は、旧来の文学を「通俗文学」とよび、これを打破する「新興文学の樹立」をつよく提唱した。彼は、彼らの前に立ちふさがる「通俗文学」がいかに根づよく、自分たちの「新興文学」の圧迫がよわまると、すぐに息をふきかえずものであるかを知っており、それだけに、それ

との対決を必至と考えていたようである。しかし彼らはその「敵」の正体を正確には把握していなかった。彼らがそれを憎み、その打破を急務としたからである。鹿島のいう「通俗文学」は、まぎれもなく、日本の近代化の踏み台、影の部分の役割りを担わされて、取り残された地方、農村社会の中に生きた人々の表現であった。そして鹿島が恐れ、憎んだ以上になお、たしなみ、楽しみとして活力を持っていたのである。この人々がどんな雰囲気の中で、あそびとしての、また楽しみとしての作品を作っていたかをうかがうにたる次のような記述がある。

臼杵新聞の編集長を中心とするものに、雑俳会といふものがあつた。選者その人の思想が、ちつとも伸びのきかぬものであるから、無論芸術的価値は甚だ低いものではあつたが、極く低級な冠沓付の狂句としては、かなりの命脈はあつた。殆ど毎月のやうに神社の奉燈句の持寄りがあり、

年に二回は、大会までも催され、彼（この文の筆者）も其の頃陣笠とか号して其の一員であつたが、此れは選者が左党であつたため、時々酒の入る事もあり、殊に会員の亀淵や一骨などは其の方の豪の者で、はては町の芸者屋にさへ誘はれ、美しい芸者の粋な小唄や艶な手踊りなども見せつけらるる事は、決して嫌な事ではなかつた。

これは大正十一年二月号の『二豊及二豊人』に掲載されている「丘の二楷家」^{（つづ）} 県人某氏の自叙伝」の中の一節である。

作者は「無名氏」と名のり、さだかでないが、作中の記述によると、白杵市浜小学校卒業後、士族で憲政派の片岡清松らによつて作られていた「白杵新聞」に職工として入り、後、一時期記者をしていた。前記はそのころの回想である。

こうしたたしなみや楽しみとしての作歌、作句は大正期にいたつても続いていた。例えば一九一八年（大正七）のある月の「大分新聞」の「文苑」欄をとつてみると、四山吟社の漢詩、葛城吟社例会漢詩、東月斎春坡門下麻生溪鬼笑会連衆による連句一卷、宗匠鷹居選大分甲辰会発句、宗匠一鷗選発句、宗匠春夏庵選発句、大阪在住の宗匠山蔭に選を乞うた玉来水声会発句、露花選新作どどいつ、半僧坊選新調俚謡等々をみる事ができる。これは氷山の一角で、こうした宗匠中心の集まりが広く、深く存在し、その中で保守的人間関係とともに階層・地域割拠の上になる保守的美的趣味、教養が再生産・保持され続けていたのである。

(二)

しかし、これらには、時として新しい文学を志向する青年たちの「新興文学」には見られない時代を諷刺する作品がみられる。特に、「新作どどいつ」に多い。

親父水呑み、子は鱧髭、孫は借り着で女学校

髭はなけれど洋服も着ねど、倉にや俵も粟もある

米の噂に夫婦が痩せて、秋を散りゆく柿紅葉

今の世界は金さえあれば、馬鹿も坐れる床柱

いずれも一九一八年（大正七）の「大分新聞」文苑」欄のものである。また、そこには麻生溪鬼笑会の連句

米穀の調節令の効もなし 月波

四十議會も先無事に済む 岳邸

の付合もみられる。

一九一八年は第一次大戦の終結、続くシベリア出兵、米騒動と日本中が激動した年である。大分連隊がシベリア出兵に動員される唯中、県下でも米騒動が頻発し、各地に小作争議がおこっていたのである。一方では戦後の好況によつて「成金」が生まれ、「金さえあれば」の社会ともなっていた。「親父水呑み」の句には「これまさに亡国の兆」の選者評がついている。この作者は「水呑み百姓」といわれた貧農の父親が苦勞して息子を鱧髭、つまり役人に仕立てあげ、その孫娘が今や借着にしても女学生になつていふという一族三代にわたる社会的階層の激変上昇を、まことに痛烈に揶揄している。それは「今の世界は金さえあれば」の句も同様である。「髭も

なければ洋服も着ねど」の作者は髭と洋服にシンボライズされる役人を冷笑する。選者露花はこの句を「痛烈骨を刺す。これ吾党の本領」と評して、露花の志向する方向も明らかになるが、これらの作者や選者露花の諷刺がある高みから成り上り者へ、髭と洋服の役人に対して「佞も粟もある」倉の所有者の立場から発しられているところに、必ずしも「痛烈骨を刺す」とはいえない諷刺の弱さを感じさせる。しかし、現状への批判を形象化している点で、新しい文学の担い手をもって任じた青年たちの作品の及ばないところであった。

(三)

「新作どどいつ」にはいま一つ「米の噂に夫婦が痩せて」のような短歌的抒情に近いものがある。そもそも「新作どどいつ」として「大分新聞」や「豊州新報」がとりあげたのは、江戸時代以来の都市俗謡としての「どどいつ」ではなく、どどいつ、端歌、民謡・盆踊歌等の混淆して生まれたというようなものであるように思われる。

一九六〇年代まで、大分県は農村・農民・漁民を主たる住民とする農漁村県であった。そしてその生活の中から生み出された民謡・民話の宝庫でもあった。例えば大野・玖珠・日田・直入等の各地でうたわれている酒宴の席の歌「よいやな節」、緒方平野・朽綱盆地の「はんぶし」(田植歌)、県北、下毛郡の山行き小歌、県南の子守歌、それに江戸時代天領だった日田には都市的な端歌風の「コッコツ節」や江戸小唄の替歌

といわれる「日田節」もある。

第一次大戦後の重工業の発展にもなつて農村から都市へと、農民が労働者となつて流出していくようになって、農村も大きく変貌しはじめる。とはいえ村社会ではまだ生活に必要不可欠なものとして盆踊唄や田植歌・山歌・舟うた・子ども歌がうたわれ、婚礼には祝歌がつきものであった。一九三〇年代でも農山村では新年の予祝に門付が来て万歳唄をうたい、大黒舞や猿まわしもきた。替女もやってきて物悲しい口説きを語っていた。しばしば芝居も興業され、秋には村祭りも行われたのであった。

こうした中で育ち、生きた者は、大なり小なりその感性の根源を歌謡的なものに持つだろう。とりわけ民謡的発想・表現はもつとも身近かなものとしてあつたらうと考えられる。

新聞が「新作どどいつ」欄に漢詩・俳句(発句)・短歌(歌)等と同等のスペースを与えているのは、どどいつ作者が多いことを知つてのことであつたに違いない。

(四)

「新興文学」を目指す青年たちを取巻く文学的状況はこのようなものであつた。彼らはこの「敵」と向い合うというよりも、それとの共存、混在の中にあつたのである。

前述「丘の二階家」の著者「無名氏」は白杵の精神的風土を「働けるものは一銭でも金儲けせねばならぬ」とするところだというが、それは何も白杵だけのことではない。大正中

期の「大分新聞」が「文苑」欄に与えているのはたかだか一段二十行からせいぜい六・七十行ぐらいである。これが実益に役立たない文学欄の遇され方なのである。新聞社からすれば道楽、息抜き、たしなみの場であつたらう。「学芸」欄として大きくスペースをとりはじめるのは昭和に入つてからである。その中に漢詩に交つて大杉栄とも関係をもつていとう人々の「平民詩」がのり、どどいつの隣に新しい文字の旗手鹿島青波の歌が並んでいるという具合である。新しい文学を目指した彼らが、従来の文学を「風呂屋文学」「床屋文学」「通俗文学」と卑しめながら、俳句や短歌の枠を破ることなく、同一基盤の中で争わなければならなかつたのが実情である。

彼らは共通して「自己に生きること」、「個性に生きること」を目指した。それは文学を自分の生き方と分ちがたく結びつけること、自分の表現をつくりだすことでもあつた。そしてそれが彼らと「通俗文学」を分ける決定的な点であつた。

彼らは

歌枕知らぬ県下の歌人が雑誌など出して春深みゆく

と投書子にひやかされる人々であつた。しかし、彼らは歌枕の代わりに現代の歌人・俳人・詩人・小説家にさへ学び、歌論・俳論・文学論を持つた。また、宗匠をいただかず自らの主張をもつ同人誌によつて立つたのである。

しかもなお彼らの多くは短歌・俳句の枠を破れなかつた。ただ短歌・俳句の形式を極限まで破壊し、内容を拡大する方

に向かつた人々がいる。

例えば大正末に俳詩『鳥』(のち「とり」)を刊行した長尾^マ鳥とその一派の人々である。

長尾は

□俳句が一つの傾向に墮して、鑄型にはまることは、われわれの何より戒慎せねばならないことであつて、この邪道を追う俳句の鑄工が多くなればなるほど、俳句は必然的に墮落してゆくばかりである。

□即ち作句に於ける思想の硬化、表現の固定は、俳句として、作者の個性を全々離れた生命なき鑄物たらしめ、遂に俳句の死滅を招来する反逆なのである。

□われ／＼は赤裸な独自の生命を永遠に刻む個性純化の詩として、飽くまで自由無限の歩道を進み、俳句をして真に流動展開して尽きぬ人間讃仰の芸術たらしめねばならない。

(『鳥』第一卷第七号 大正十二年十一月・巻頭言)

と説いた。その作品は

○山霧しんしんと水の音がれいづる

○裸木ばかりの家まわり風鳴りやまぬ

○元日するどい風の枯草を焚かうとする

○一月一日のちまたを泣いてさまよう男であつた

という口語自由律のものであつた。彼の雑誌には農民俳人の佐々木葭生、倉田素直などもいた。佐々木は村の家の貧しさを繰返しうたつた。

○焚火へ帰へる貧苦の窓の小ささ

○とぼしくくらすものに鶴鴿地に啼く

○をとこは声なく培ふ野菜畑が暗らい

○無職者の太い手だ赤椿散るや

○五月の陽のおびただしさ桐の花咲く

倉田もまた村のくらしをうたつたが、それはくらしの匂い

とてもいうものをつよくただよわせている。

○田打ちの泥足袋でのさ／＼やつて来た

○汚れた首句はして窓うちにくらき夏めき

○働き瘦せし秋の夜のま／＼い畳

○庭くさもみづるたくらみもなき女のふところ

○男があかれて秋蚕の白さつかめぬ

農民や農村を外から眺めて詠ずるというのではなく、農民

自身が自らのことばで作つた句である。季語も季語というよ

りくらしの匂いとしてある。佐々木の「五月の陽のおびただ

しさ」、倉田の「のさ／＼やつて来た」や「秋蚕の白さつかめ

ぬ」は、とりわけそうしたことを感じさせる表現である。

水鳥鳶郎はもつと型を壊しながら貧をうたつてゐる。彼は

季語はもちろん、季節感さえ無視している。

○草が風にふかれてゐるのをごらん草も風もあんなにまじめ

だ

○貧乏人はみな俺の兄弟だといふ気がする

○海がおし黙つてゐて妻がうなだれてゐて私が黙つて泣きた

くても泣けない

○まっ黒になつて働いてゐる鮮人、人間同志だ握手してやろ

か

家庭内のくすぶり、不和をうたつた佐藤禾黄の句もある。

○青梨つかみそれ程の逆ひである

○焼酎の一本がそれ程にうれしゅうて老いてゆく酒やけの父

か

○裕衣の借着のまま家出した二男三男

○短銃を自由にして蝙蝠に囚はれてゐる

口語・自由律、時には無季とすることによつて、素材も大

きくひろがっているのをみることができらう。

この傾向は同時に短歌にもみられる。

葉山耕三郎を理論・実作上の柱として、鹿島露梢によつて

一九三一年に創刊された『詩歌行動』は、現代を積極的に生

き、歌う「近代主義短歌」の実験場であつたが、それは定型

打破、自由律の主張となり、そのことが当然歌材を拡大させ、

感情の質を変えないではおかなかつた。

『詩歌行動』刊行当時は、一九二九年からの恐慌によつて農

村の窮乏はその極に達しており、その上都市にあふれた失業

者が故郷をめざして帰つてくる時代であつた。当時の調査に

よると、「借金の重囲に陥つて破産状態にあり、最早全く回復

の見込みのない家」、「無資産・極貧・朝夕の食事にもことかく

家」、「公共の救助に依つて辛うじて暮している家」が一〇戸に

一戸あつたという。（『大分県史近代篇』「苦悩する農民」二二七

頁）

そこへ失業して都市から帰ってくる人々が加わるのである。

「大分新聞」昭和六年三月一日号は「何処へ行ったか県下四〇〇〇の失業者——大部分は帰農したらしい農村は二重の負担」と、農村の苦悩を伝えている。県下の市町村役場職員、小学校教員に対する給料不払いが起り、さらに、これらの人々の給料切下げ運動が各市町村住民によって激化してきていた。

葉山耕三郎は、『詩歌行動』第六集掲載の連作「農村哀調」の中で、

○深夜の村々は寂しい墓地だ、石塔のやうな家々に、百姓達

がみる地獄の夢

○媒けた藁屋根が、ぎいぎい暴風に傾く、おふくろはじつと

燈明をおがんでいる

と、当時の圧しつぶされている村の家の暗さをうたっている。

『詩歌行動』発行者鹿島露梢や、その主要メンバーであった津崎朴二らにも同様な歌が多い。

○パチパチはぬる炭火の音が暗い感情をいらつかせる、夜更

○俺の生活と自力更生と何う連続するか、夜更けの火鉢に考

へ込んでゐる

○貧乏のつらさを話合った友が帰った後の火鉢に急に寒さを

感じた

鹿島露梢

津崎は満州事変をも短歌の対象とした。

○満州に出征するといふ昂奮が、こんななまで兵士と民衆と

を一つにする

○連盟を脱退しろ！窮乏のどん底に喘ぎながらも村人らの熱意は強い

○無力な漁民らの昂奮だ、武装した国体の意志にうたれる

当時、県下でもっとも正統派短歌作者と目されていたのは、アララギ派の人々で、その中心的な浅利良道、瓜生鉄雄らは一九二八年、『大分歌人』を刊行、のち脱退、一九三一年には『高志』を創刊したが、伝統的定型の中でことばを練り、自然詠を中心に境地をふかめようとする彼らの中にも、形式内容に変化がみえはじめた。例えば『高志』創刊号には次の歌がみえる。

○御馳走は何が好きかといふ問ひにあはれ一やうに飯がすき
といふ

○一年に幾度いたたく米飯ぞまますがすきとふあはれこの児ら

土橋正夫

土橋は、県下のある小学校分校教師である。

浅利は一九三五年に戦前県下歌壇の総決算といわれる『大分県歌人作品集』を刊行する。この中にもおだやかな自然詠日常身辺の出来事に対する詠嘆だけでおさまらない人々の作品がみられる。

○ミリタリズムをひそかに呪ふ、農土に麦が刈りつばされ、

百姓ら、その徒勞に見いる

日枝正文

○国体の尊厳を潰すとただけしき右翼ギャングの徒をうち
のめしたし

大久保貞義

○不作にて免租願に人等役場の土間に皆黙し立つ

○釜たぎる音を聞きつつ我はしもこの家の経済を思ひつつを
り
○仁川の街に売られて行きし教子の噂をわれの聞くはしのび
ず

定型を守る人々でも、その素材の社会化で詠嘆の質がかえられていく。それを行わせたのは窮迫する現実の社会であった。はじめから定型を打破する立場をとった葉山ら『詩歌行動』の人々は生硬なことばと、古典的な意味では短歌とは言えない、読点などを使った、散文に近い自由律で作歌した。

かつて窪川鶴次郎氏は、短歌における各句の結合のしかたに注目し、そこに短歌の本質をみた。

つまり、

第一句は第二句に、第二句は第三句へと従属してゆくといふこと、また第四句は第五句に従属しているといふこと、そして第一句から第三句までが全体として第四句と第五句との全体に従属しているといふこと、このような従属関係において、しかもその従属関係が第四句と第五句とで七音を重ねることによって漸増的に強調されてゆくといふこと、このような従属関係にあるところに、短歌の音律の本質が認められる。(『短歌論』)

といふのである。そして、この五句三十一日従属関係の積み重なりがもたらすものを詠嘆であるとし、これを短歌の方法と規定した。つまり短歌の方法とは、その「従属関係」から生

み出されてくる「詠嘆」であるとするのである。

そういう規定からすれば『詩歌行動』の人々の作品は、すでに短歌とはいえないだろう。各句の独立性がつよい、といふより散文さながらで、読点まで入っている。これが恐慌下の農村をうたったために起ったのか、形式の破壊によっておこったのか、恐らく、その両者のせめぎ合いの中で生まれたものであらうと思われる。

それは長尾瞿鳥の『鳥』に集まった人々が、季節感を人間のくらしと深く結びつけてとらえ、ほとんど季語の意識をすて、自由律で、社会、人生の批評として作句しているのと対応する。

もちろん、こうした新しい方法の模索は全国的な動向で、大分県特有のものではない。彼らがどれほど全国各地の新傾向に敏感であり、その影響をうけていたかは、稿を改めて考察したいと思う。しかし、彼らの新傾向への模索が単なる流行現象の模倣でなく、自らが模索する中で他に学ぶというきわめて創造的活動であったことは見のがせない。これは社会的個の確立とその表現形式をつくり出す方向を追求していたといえる。

(五)

彼らは短歌・俳句の形式を大胆に破壊し、両者の境も少しば越えようとしている。人間的交流もまた深かったようである。長尾の『鳥』に葉山やその仲間が作品を寄せており、

長尾もまた葉山らの雑誌に書いた。彼らは自らの形式をいまだ過渡的なものと捉え、いまださだかならぬより新しい形式によって、いまださだかならぬより新しい内容をつかもうとしていたかに思われる。

家族制度、地主小作制の支配する農村県では表現は固定し、文学は趣味・芸としてしか存在しにくい。葉山や長尾の新形式への模索はこうした中で考えられねばならない。当然、近代小説、近代詩の生まれる地盤ではない。しかし、農村的秩序はすでにゆらぎはじめた大正期以後は、さまざまな方向、(小説にむかうべきエネルギーも含めて)へ向うべき模索も生まれ出ており、口語自由語も作られていた。しかしそれらはいずれも未分化なものであった。したがって葉山や長尾の実験ともいえる新形式への模索は、さまざまなジャンルへ向うべき未分化なエネルギーを含み込んで行われた。それは伝統詩を内部から変革する可能性をもった運動であったのである。

しかし、日中戦争の勃発を機にその運動は終息させられる。政府による国民精神総動員、日本文化中央連盟設立などによる日本文化宣揚のための運動がすすめられたからである。俳句・短歌とともに伝統的定型への復帰が急速にはじまる。

葉山は当時大阪にあったが、一九三一年創刊の新興短歌機関詩『韻律』を一九三五年に廃刊。葉山らの『詩歌行動』と関係の深かった前田夕暮の『詩歌』も一九三八年定型復帰の態度を明らかにした。大正期から、県下の俳句革新運動に大

きな影響を与えてきていた福岡の吉岡禪寺洞も『天の川』刷新宣言をする。一九三八年元旦の『大分新聞』は、同紙「俳壇」の選者白田亞浪が、俳句と祖国愛を結合させる「民族詩」の提唱をし、県下の代表的歌人の一人であった原常雄は同紙一月二十六日に「短歌と短歌」を書き、短歌を「しきしまの道」の表現とする考えをのべた。

こうした動きは、葉山らを定型に復帰させたと同時に、これまで悪戦苦闘してきた「田舎者の自己樹立」の成果をふみにじり、自己樹立を崩壊させるものであった。